

○地域貢献研究 T-2

研究課題 「地域の医療職等への「IPUあいらぼ」利用促進に関する研究」

○研究代表者 医科学センター教授 武島玲子

○研究分担者 看護学科 教授 吉良淳子、 准教授 高村祐子、 助教 黒田暢子
(12名) 理学療法学科 教授 富田和秀、 助教 岩本浩二、 作業療法学科 助教 真田育依
放射線技術科学科 助教 大久保和幸
人間科学センター 嘱託助手 鈴木啓太
医科学センター 准教授 桜井直美、 助教 角 友起、 嘱託助手 角 正美、 中根聡子

○研究年度 平成28年度

(研究期間) 平成26年度～平成28年度(3年間)

1. 研究目的

平成25年度に本学に講習会が開設され、学生、付属病院職員等に利用されている。次段階として、「IPUあいらぼ」を地域へ広く開放する必要があるが、そのためには、シミュレーション医療教育を広く普及させ、本教育指導者の育成を図ることが重要となる。本研究は、「IPUあいらぼ」を大学外へ解放すること、シミュレーション医療教育を提供すること、本教育プログラムを作成すること、教育するインストラクターを養成することが目的である。特に看護師の場合は、新人看護師研修制度が努力義務化され、多くの病院で研修プログラムが実施されているが、中小規模の病院や医院の現状では、研修実施や、指導者の確保が困難なことから、多施設合同での研修が必要である。現在、茨城県看護協会がそれらの役割を担っているが、技術の研修を「IPUあいらぼ」において、シミュレーション医療教育による看護師の現任教育を行うことが提案できる。これは看護師ばかりでなく他の専門職(生涯教育のシステムがまだ確立されていない介護士等)においても同様な役割を担っていくことが必要であり、これらの点も検討する。本年度は、①「IPUあいらぼ」の周知のため、講習会を開催して周知の向上を図ること、②これまで6年間、地域への本学の解放の1つとして中学生への体験講習会を実施してきたが、その中学校からの要望を把握すること、③介護職へのセミナー開催をして「IPUあいらぼ」と講習会の周知の方法を検討することを目的とした。

2. 研究方法

- ①認知度向上のために、講習会を開催し、その反応から今後の対応を検討する。
- ②これまで6年間の夏休み中学生への体験講習会を実施してきた。これまで提供したプログラムが中学校のニーズを調査し、今後のあり方を検討する。
- ③近隣の介護施設の介護士を対象に講習会を開催し、普及のための意見を調査する。
- ④広報活動として、県内看護専門学校の学生・教員の本学見学時に「IPUあいらぼ」の説明会を開催する。

3. 研究結果

①学内セミナー開催 (大学学生・教職員対象)

- ・「テーピング講習会」を2回(6月、11月)開催した。参加者は学生31名、教員2名であった。参加者へのアンケートでは、内容に満足し、今後の継続的な開催も希望していた。
- ・「BLS講習会」を2回(6月、7月)開催した。参加者は学生5名(1年生)であった。内容に満足していた。
- ・看護学科との協働で4年生に看護手技(輸液管理、採血、注射、導尿など)のセミナー(2月20～23日)を開催(10名参加)した。昨年度の開催(平成28年3月)のアンケート調査では、看護技術は上達したという結果であり全員が満足していた。丁寧な指導に満足し、有意義であったとの感想が多かった。開催時期の問題を指摘されたため、今年度は早めに2月開催とした。開催場所は実習器具の移動があるために看護実習室に変更した。

②夏休み中学生体験講座に関して中学校の要望調査

調査を依頼した中学校の90%が本学開催に関心あり、特に研究者としての大学教員や付属病院での看護師、理学療法士、栄養士などの仕事に興味を持っていたという結果であった。

③地域の介護士への講習会(H29.2開催、8名参加)

口腔・気管内吸引講習会を開催した。全員から好評を得、継続を希望された。セミナー開催のよい周知方法はFAXが多く、大学ホームページは少なく、郵送はまったくなかった。

④県南の看護学校2校の本学見学実習で、「IPUあいらぼ」の説明とシミュレータの実演見学をした。(学生160名、教員8名)

4. 考察(結論)

本研究のこれまでの結果から、本学学生のシミュレーション教育の認知度は低いが、多くの学生が多職種によるシミュレーション教育の開催を希望していることが明らかとなっている。そのため、今年度は認知してもらうために、初めに「IPUあいらぼ」の整備をして明るく使いやすい場所とした。その後各種講習会開催をして認知されるように計画した。学内への講習会開催日は授業のない水曜日5限にしたが、参加者は4学科の1年生がほとんどであった。参加者の多くは時間には満足していた一方で、参加希望者は多くはなかった。参加者は丁寧な指導に感謝し、これからの自分の学修に有効であったようである。解剖の重要性を知った、もっと知りたい、次回も参加したいという学生が多くみられた。実際に参加すればよかったと思うようであるが、その参加者が少ないということの意味を今後検討していきたい。看護学科との協働開催の4年生看護技術講習会も同様で参加者の感想はよいが、参加者は少ないという現実である。

本学では、これまでの6年間、中学生職場体験学習の受け入れを行ってきた。しかし、提供してきたプログラムが中学生や中学校のニーズに合っているか否かについての検討はされてこなかった。本研究結果では、本学における中学生を対象とした地域貢献事業に関心のある教師が約90%を占めており、特に研究者としての大学教員や付属病院での看護師や理学療法士、栄養士などの仕事への興味多かった。開催時期や実施日数・時間など、検討する必要のある課題も明らかになったので、より有意義な地域貢献活動が提供できるようさらに精査していきたい。

介護施設の介護士への医療教育については、その必要性を認識してきた。教育も普及してきているものの、介護士へ十分とはいえない現状である。参加者の満足度は高く、教育の必要性を認識している施設も見られるので、「IPUあいらぼ」を利用して今後も実施していきたいが、その周知方法が難しい。大学HPは見えてくれない、郵送では未開封となり効果がないので、今回はFAXを利用した。それでも介護施設53件にFAXしたが、参加は4施設であった。参加者の感想はすべてよいものであり、定期的な開催を希望していた。広報活動の検討が必要である。

その広報活動の一環として、県内看護学校の本学の見学実習の時に「IPUあいらぼ」に来ていただいている。施設の説明と実際にシミュレータを作動させ体験学習を実施している。この学生が医療職についてから本学を利用してもらおうことができればよいと考えている。

さらに、現在「IPUあいらぼ」はチームワーク入門の実習場所となっているが、1年生ばかりでなく、4年生のチームワーク演習にも利用した学修を提案していきたい。「IPUあいらぼ」を利用する授業を増やす活動やサークル活動による学生主体の勉強会を開設することも検討していきたい。現在大学HPに「IPUあいらぼ」の利用方法や内容が掲載されており、徐々にではあるが知られるようになってきた。特に付属病院からの利用がスムーズになってきたが、学外からの認知度は低いようである。広報活動を含めて今後の啓蒙活動が必要である。運営に関する将来計画をする必要がある。

今後の課題として、「IPUあいらぼ」を使用した授業や講習会の充実、シミュレーション教育の実施とその指導者の養成をしていくことが検討事項であり、「IPUあいらぼ」が理解され、地域へ開放するために必要なことである。

5. 成果の発表(学会・論文等、予定を含む)

- ①中学生を対象とした地域貢献活動－中学生に伝える“職場”としての大学および付属病院 一. 角正美, 旭佐記子, 増成暁彦, 大久保知幸, 角友起, 寺門通子, 野村加津子, 川村拓(放射線技術科学科, 中島修一, 古家宏樹, 武島玲子. 茨城県立医療大学紀要 2016;21:79-88

6. 参考文献